港湾振興便り

2020．3
第154号

＊：＊：＊：＊：＊：＊：＊＊：＊：＊：＊：＊：＊：

＊：

1　ポートエッセイ　―　日本経済の正念場　―

～　日本港湾振興団体連合会会長（新潟市長）　中原　八一　～

＊：

中国の湖北省武漢市で発生した「新型コロナウイルス」が「世界の工場」と呼ばれる中国の生産ラインや物流を止め、ここにきて、100を超える国・地域へと感染が広がり、人やモノの動きまで止まる事態に至った。

中国では未だ製造業の稼働を一部見合わせており、サプライチェーンの回復にはしばらく時間が掛かりそうである。

日本の自動車産業では、中国製部品の不足により国内の製造ラインに影響が生じ、新車登録台数の減少に繋がっている。

また、建築業界では、住宅設備や建築資材等に輸入の遅れが生じており、納品の時期の目途が立たないことから、施主への住宅の引き渡しが滞るという事態も起きている。

更に深刻なことが、国内での感染拡大である。

本市においても、2月29日に初めて感染者が確認されて以降、少しずつ感染者数が増えている。

市では感染者の行動歴や濃厚接触者の調査を行い、該当される方には健康観察や自宅待機をお願いするなど、これ以上感染を広げないよう全力を挙げて取り組んでいる。また、市民が過度な不安を抱くことのないよう、市民にとって必要で正確な情報発信に努めている。

併せて感染者の予想以上の増加に対応するため、県との連携を密にし、新潟市医師会とともに県や新潟大学を含む市内の医療機関による検討会を行うなど、早急に医療体制を構築していかなければならない。

全国的な流れであるが、感染防止策の一環としての自粛や移動制限などもあらゆる業界に影を落としてきている。

本市でも卒業式、大規模イベント、各種会合など、2月中旬から3月末までのコンベンション施設やホテルの催事場などに予約のキャンセルが発生しており、地域経済に影響を及ぼしている。

こうした自粛による消費低迷が長期化することになれば、日本の経済に大きな打撃となり、雇用の縮小へと波及しかねない。

政府からは、企業活動や国民の暮らしに与える影響が最小限に留まるよう資金繰りや雇用など、多方面において手厚い支援を講じて頂くようお願いしたい。

新型コロナウイルスの感染拡大が一刻も早く収束し、正常な日が戻ることを祈っている。

＊：

2 トピック

＊：

●海上コンテナによる小口混載輸出の実証実験～台湾で道産品の販売会を開催～

（北海道開発局　港湾計画課）

北海道開発局では、北海道総合開発計画における道産食品輸出額1,500億円の達成に向けて「農水産物輸出促進基盤整備事業」による屋根付き岸壁を整備するなど、輸出拡大に向けた取組を進めています。

このたび、その一環として道産食品の輸出拡大に向けた輸送コストや海外のニーズ調査を目的に、海上コンテナによる小口貨物の混載輸出及び海外でのテスト販売等の実証実験を行いました。

本実験では、令和元年８月から試験運用を開始した「道産食品輸出チャンネル」※を通じて集まった道内企業２９社（66品目）の商品を９月～１１月にかけて、苫小牧港発の計５本の海上コンテナによる小口混載便を利用して台湾の基隆（キールン）港まで輸出しました。

令和2年1月から販売会場である台中市のアンテナショップで順次販売を開始したところ、オホーツク産の長芋や別海町産の生乳を使ったアイスクリームなどが評判ですぐに売り切れました。

そのほかにも、枝幸冷凍ホタテ貝柱、スィートポテト、シュークリームなどに人気があり、令和2年2月末まで店舗販売されました。同会場では海外輸入企業との商談も行われました。

道産食品の輸出拡大に当たっては、輸出先のニーズ把握が困難、通関等による厳しい輸入規制、高額な輸送コスト等の多くの課題を抱えていることから、こうした課題の解決に向けて、一般社団法人北海道国際流通機構の協力を頂きながら、今年度の実証実験を行いました。

※道産食品輸出チャンネル：

道産食品の輸出拡大のために、道内企業の輸出ニーズを集約し、海外バイヤーとのマッチングを可能にするサイト。

苫小牧で行われたバンニング作業

販売会場である台中市のアンテナショップ

「道産食品輸出チャンネル」を利用した商談

●小名浜港東港第1号岸壁へ貨物船が初入港

（東北地方整備局　小名浜港湾事務所 企画調整課）

３月４日、小名浜港沖合に整備を進めている小名浜港国際物流ターミナルの東港第１号岸壁に貨物船（石炭）が初入港し、近隣の火力発電所向け石炭約5万トンが荷揚げされました。

小名浜港は、平成２３年５月に国際バルク戦略港湾（石炭）に選定、その後、平成２５年１２月には特定貨物輸入拠点港湾（石炭）に指定され、東日本地域の石炭輸入拠点としての機能強化を図るため、国際物流ターミナルの整備が進められています。

平成３０年９月に、石炭を取り扱う公共岸壁としては国内最大級である水深１８ｍ岸壁の整備が完了し、令和元年１２月より暫定供用を開始。現在は、水深１６ｍの大水深岸壁や航路・泊地の整備を重点的に進めており、引き続き、早期完成を目指して福島県、民間事業者と協力しながら事業を推進しています。

小名浜港国際物流ターミナル全景

荷役作業の様子

●水辺のない「みなと」？～みなとオアシスさの～

（関東地方整備局　港湾空港部）

令和2年2月22日（土）、「みなとオアシスさの」（栃木県佐野市）が136箇所目の「みなとオアシス」として登録されました。

「みなとオアシス」とは、地域住民の交流や観光の振興を通じた地域の活性化に資する「みなと」を核としたまちづくりを促進するため、住民参加による地域振興の取り組みが継続的に行われる施設として、国土交通省港湾局長が登録するものです。

「みなとオアシスさの」の代表施設である「佐野インランドポート」は、海上コンテナ輸送の内陸拠点となる物流施設で、コンテナ輸送施設の見学会や、つながりの深い京浜港・茨城港のPRを通じて、内陸にいながら「みなと」を感じることができます！

その他、佐野駅前交流プラザ「ぱるぽーと」で開かれる「ぱるぽーとマルシェ」では、北関東自動車道で通じるひたちなか市からの新鮮な海の幸が購入でき、「道の駅どまんなかたぬま」では、三陸の牡蠣を食べることができる「牡蠣小屋」が開催されるなど様々な「みなと」を満喫していただけます！

代表施設「佐野インランドポート」

佐野インランドポート見学会の様子

ぱるぽーとマルシェの様子

●四日市港ポートビル「うみてらす14」で「工場夜景の日」イベントを開催しました！

（四日市港管理組合　振興課）

２月２３日の「工場夜景の日」を記念したイベントを四日市港ポートビル１４階展望展示室「うみてらす１４」で開催しました。

工場夜景のパネル展示や夜景写真講座、「うみてらす１４」の特別ライトダウンを実施するとともに、四日市港グッズや全国工場夜景カードの配布を行いました。

イベント期間中は約3000名の方々にお越しいただき、大変盛況となりました。

【夜景写真講座の様子】

【「うみてらす14」から望む四日市港の工場夜景】

●津なぎさまち開港15周年記念事業「持続可能な津なぎさまち学ぼう！フェスタ」「津なぎさまち開港１５周年記念シンポジウム」を開催しました。

（津なぎさまちイメージアップ事業実行委員会（津市交通政策課））

２月１６日（日）、津なぎさまちの賑わい創出を目的に組織された「津なぎさまちイメージアップ事業実行委員会」が津なぎさまち開港１５周年記念事業を開催しました。

当日は、地元中学校によるジャズ演奏、写真家浅田政志氏による写真撮影教室、三重大学学生によるSDGs学習ブース、地元グルメ津ぎょうざ等のふるまい及び開港15周年を記念するシンポジウムなどの企画を実施し、悪天候の中、約500人もの来場者で賑わいました。

【地元中学生によるジャズ演奏（オープニングセレモニー）】

【写真家 浅田政志氏による写真撮影教室】

【津なぎさまち開港15周年記念シンポジウムの様子】

●第10回全国工場夜景サミットin堺・高石の開催

（大阪府高石市　政策推進部総合政策課）

２月８日（土）に全国各地の工場夜景をPRする第１０回全国工場夜景サミットin堺・高石が大阪府堺市のフェニーチェ堺で開催されました。このサミットでは、写真家らによる工場夜景の魅力の紹介と、その魅力を実際に見て感じられる工場夜景のフォトコンテストが行われました。

サミットの最後には、工場夜景の美しさや力強さなど、その魅力を全国に向けて発信し続けることにより、さらなる工場夜景観光の発展に尽力することを誓った共同宣言が行われ、次年度開催都市は神奈川県川崎市であることが紹介されました。

【多くの方が訪れたサミット会場】　　【参加都市による共同宣言】

また、サミットの開催後には、大阪湾岸に広がる堺泉北臨海工業地帯に点在する工場夜景を観賞できる場所を巡る『特別工場夜景ツアー』が催行されました。普段は入ることができない場所から工場夜景を見ることができることもあって、応募人数が募集人数を大幅に上回るほど大盛況でした。

【工場夜景（高石エリア）】　　【ツアーの様子(堺エリア)】

●「みなとオアシス笠岡諸島」登録証交付式を開催

（中国地方整備局　港湾空港部　クルーズ振興・港湾物流企画室）

令和2年2月22 日（土）に「みなとオアシス笠岡諸島」（岡山県笠岡市）が新規に登録され、全国では137箇所目のみなとオアシスとして活動を開始しました。登録にあたり登録証の交付式が同日、地元イベントの「日本遺産認定記念シンポジウム」に併せて行われ、「みなとオアシス笠岡諸島」の設置運営者である小林嘉文　笠岡市長へ登録証を交付しました。オアシスとして登録されたのは、諸島周遊基点となる笠岡諸島交流センターを中心に、高島、白石島、北木島、真鍋島、大飛島、小飛島、六島の代表施設。各島で島の歴史文化や大自然を活かして四季を通じて地域づくりに根ざしたイベントを開催しています。

小林嘉文　笠岡市長からは「ひとりでも多くの方に笠岡諸島にお越しいただいて島の文化財を見ていただき、島の美味しいものを食べてゆっくりした「島時間」を味わっていただけるように、頑張っていきたい。そのためにも、みなとオアシスをしっかりと活用させていただきたい。」とのお言葉をいただきました。

登録証交付式

日本遺産認定記念シンポジウム

●もっと、自分たちの住む地域を知るため、まずは港へ行こう！！～小松島高生出前講座～

（四国地方整備局　小松島港湾・空港整備事務所　企画調整課）

小松島高校は、横須海岸の松林の育樹活動を約20年続けており、また海岸清掃（リフレッシュ瀬戸内というボランティア活動）にも毎年参加しています。そんな小松島高校の生徒を対象に地域と港の関係を学ぶ出前講座（2月13日）を行いました。

出前講座では、事務所の海洋環境整備船「みずき」が、船舶の安全確保、海洋の環境保全のために海の浮遊ゴミを日々回収していること、私たちの身の回り品の多くが海外からの輸入によるものであり、こういった輸出入の拠点として船舶が入港している港の役割について事務所の港湾業務艇「ひのみね」に乗り説明し、海洋環境整備事業が自身の生活に深く関わっていることを伝えました。加えて、「みずき」が被災地へ遠征して、災害がれきを回収したことも紹介しました。

また、生徒達が参加している海岸清掃が海洋の環境保全にも役立っていること、大切にしている松林が防風林、防砂林として背後の住宅を守っていること等を説明しました。

生徒達からは、浮遊ゴミの回収方法やクルーズ船のツアー等についての質問がありました。講座後のアンケートでは、「参加していたボランティアが単なるゴミ拾いではなく、地域の環境保全のために大切なことだという印象に変わった」、「浮遊ゴミを回収してくれている人達がいると知ったので、僕も海をきれいにしていけるよう心がけたい」、「港といえば漁港というイメージが強かったが、物流という私たちの生活に必要な場所という印象に変わった」等の（港への興味をもってもらった）感想をいただきました。

今回の出前講座で、生徒達の活動の意義を再確認してもらうとともに、港湾都市小松島が生活を支えていることを理解してもらえたと感じました。これからも出前講座を通じて港湾行政をPRすることで、港の役割や事務所の仕事を多くの皆さんに知ってもらおうと思っています。

「ひのみね」に乗り港を探検！

満足した様子の小松島高生
記念にパシャリ

＊：＊：＊： 本メールマガジンに関するお問合せやご意見、また情報の送り先 ：＊：＊：＊ ＊：＊：＊：

日本港湾振興団体連合会事務局
〒105-0002 港区愛宕１－３－４
TEL：03-5776-0630 FAX：03-5776-0631
e-mail：bcf06323@nifty.com

＊：